

『播磨国風土記』の「南毘都麻」について

大坪 併治

【要旨】

『播磨国風土記』の加古郡に「南毘都麻」の島があつて、それに関する地名伝説が語られてゐる。

印南の別嬢が、大帯日子命（景行天皇）の求婚を避けて隠れた島だから、南毘都麻の島と言ふ。ナビは「隠れる」意味、ナビツマは「隠れた妻」のことだと言ふのである。ナブは、岩波書店の「古語辞典」に載せないが、小学館の「日本国語大辞典」には、な・ぶ【隠】（「自バ四」）「なばる（隠）」に同じ。（補注）『播磨風土記』の賀古郡と印南郡の条に、「隠れ居たから南毗都麻（ナビツマ）という」という地名起源説話があるところから、この語が存在したと考えられる。

とあつて、『播磨風土記』の「南毘都麻」を引用して、ナブの語の存在を推定してゐる。

私は、石山寺本『大智度論』古点（第三種点、貞観八八五九〜八七六〇頃の加点）に「伏匿」をナビカクスと読んだ例を発見した。

○酒上有（二）卅五の失一。何等を卅五といふ。……八者、伏（三）匿（四）之事を、尽く向（五）て人に説く。（二三、16/1）

これを追加することによつて、「かくれる」または「かくす」意味のナブの語の存在してゐたことが確実になつた。「南毘都麻」の島の伝説は、このまま受け入れてよい。

（大修館書店『大漢和辞典』に、「伏匿フクトク ふしかくれる。ひそむ。世を避ける。」とある。）

【本論】

『播磨国風土記』を説むと、賀古郡に、「南毘都麻」と言ふ島があつて、それに関する地名伝説が語られてゐる。

この岡に比礼墓あり。稽察と号くる所以は、昔、大帯日子の命、印南の別嬢を誂ひたまひし時に、御佩刀の八咫の剣の上結に八咫の勾玉、下結に麻布都の鏡を繫け、賀毛の郡の山の直等が始祖、息長の命、一の名は伊志治なり。を媒と為て、誂ひ下り行でましし時に、（中略）遂に赤石の郡廨の御

井に到り、御食を供進りたまひき。故れ、斯の御井と曰ふ。その時、印南の別嬢、聞きて驚き畏み、すなはち南毘都麻の島に逃げ度りき。ここに、天皇、すなはち賀古の松原に到りて、覓ぎ訪ひたまひき。ここに、白き犬、海に向かひて長く吠えき。天皇、問ひたまひしく、「是は誰が犬ぞや。」とのたまふ。須受武良の首、対へまをしけらく、「是は別嬢が養へる犬なり」とまをす。天皇、勃りたまひしく、「好く告げつるかも」とのりたまふ。故れ、告の首と号けたまひき。すなはち、天皇この小島に在るを知りたまひて、すなはち、度らむと欲ほしき。阿閉津に到り、御食を供進りたまふ。故れ、阿閉の村と号く。(中略)又、船に乗らしし処に、裾以ちて榊を作りたまふ。故れ、榊津と号く。遂に度りて遇ひたまふ。勅して「この島に愛妻隠びつ。」とのりたまひき。仍りて南毘都麻と号く。

(此岡有^二比礼墓^一。所^三以号^二摺墓^一者、昔、大带日子命、^二印南別嬢^一之時、御佩刀之八咫劍之上結尔八咫勾玉、下結尔麻布都鏡繫、賀毛郡山直等始祖息長命、^一名^二伊志南^一、^三為^レ媒而、^二下行之時、(中略)遂到^二明石郡御井^一、供^二進御食^一。故曰^二斯御井^一。尔時、印南別嬢、聞而驚異之、即遁^三度於南毘都麻島^一。於^レ是、天皇、乃到^二賀古松原^一、而覓^レ訪之。於^レ是、白犬、向^レ海長吠。天皇、問云、「是誰犬乎。」須受武良首、対曰、「是別嬢所^レ養之犬也。」天皇、勅云、「好告哉。」故

号^二告首^一。乃天皇、知^レ在^二於此少島^一、即欲^レ度。到^二阿閉津^一。供^二進御食^一。故号^二阿閉村^一。(中略)又、乘^レ船之處、以^レ裾作^レ榊樹。故号^二榊津^一。遂度相遇。勅云、「此島隱^二愛妻^一。」仍号^二南毘都麻^一。」(小学館発行『新編日本古典文学全集』本による。)

昔、大带日子命、即ち、豊行天皇が、播磨の國に出かけて、印南の美女に求婚された時、美女は驚いて、近くの小島に隠れた。天皇は、阿閉村に行き榊津から船に乗り、島に渡つて、美女にお遭ひになった。そして、「この島に愛妻隠びつ。」と仰つた。それで、島の名を南毘都麻と呼ぶやうになつたと言ふ話である。

同じ地名伝説は、印南郡にもある。

郡^二南の海中に小島あり。名を南毘都麻と曰ふ。(中略)

志我の高穴穗の宮に御宇しめしし天皇の御世に、(中略)比古汝茅、吉備比売に娶ひて生める児、印南の別嬢なり。この女の端正しきこと、当^二時に秀^レれたり。時に大带日古の天皇、この女に娶はむと欲して下り幸行しき。別嬢聞きて、すなはち件の島に逃げ度りて隠び居りき。故れ、南毘都麻と曰ふ。(郡南海中有^二小島^一。名曰^二南毘都麻^一。志我高穴穗宮御宇天皇御世、(中略)比古汝茅、娶^二吉備比売^一生児、印南別嬢。此女端正、秀^二於當時^一。爾時、大带日古天皇、欲^レ娶^二此女^一、下幸行之。別嬢聞之、即遁^二度件島^一、隠居之。故曰^二南毘都麻^一。(同)

「ここでは、印南の別嬢を、「この女端正しきこと当時に秀れたりき。」と言って、その美しさを称へてゐる。今で言へば、「ミス印南」か、「ミス播磨」とか言ふところであらう。そして、南毘都麻の位置を、「郡の南の海中に小島あり。名を南毘都麻と曰ふ。」と言つて、漠然とはあるが、南毘都麻の位置を示してゐる。

また、天皇が「賀古の松原」にお着きになつた時、別嬢の飼つてゐた犬が、飼主を求めて、海に向かつて吠えたこととある。これは、南毘都麻が「賀古の松原」に近い海にあって、松原から見える距離にあつたことを語つてゐる。加古川の川口に近い浜の宮天神の辺には、現在でも黒松の林があり、山陽電鉄本線には、「尾上の松駅」と言ふ駅もある。この辺り一帯に昔から黒松の林があつて、海上からでもよく見えたのであらう。

「印南の別嬢」が大帯日子命の求婚を避けて、南毘都麻に逃れたとあるが、古代には、女性が求婚された時に、一度身を隠す、それを男性が探し出して、妻にすると言ふ風習があつたらしく、「出雲国風土記」にも同じやうな話が出て来る。

宇賀郷、郡家の正北一十七里二十五歩なり。所造天下大神神、神魂命の御子綾門日女の命を譲め坐しき。爾その時、女神肯ひたまはずして逃げ隠りたまひき。時に、大神伺ひ求ぎ給ひし所、是れ則ちこの郷なり。故、宇賀といふ。(宇賀郷、郡家正北、一十七里廿五歩。所造天下大神命讓坐神魂命御子綾門日女命。爾時、女神不肯、逃隠之。時大神伺求給所、是則此郷也。)

故云「宇賀」。(加藤義成著「出雲風土記参究」)

宇賀の郷に伝へられた伝説で、「天の下造らしし大神の命」が、「神魂の命の御子綾門日女の命」に求婚された時、女神は従はないで、逃げ隠れて、姿を隠された。大神はその隠れ場所を探して、お求めになつた。それがここ、即ち宇賀の郷だと言ふのである。

「播磨風土記」の「南毘都麻」の伝説では、ナビツマが「隠れた妻」の意味に用ゐられてゐる。ナビツマが「隠れた妻」ならば、ナビは隠れる意味の動詞と言ふことになる。小学館の「日本国語大辞典」でナブを引くと、

なぶ【隠】(自バ四)「なばる(隠)」に同じ。(補注)「播磨風土記」の賀古郡と印南郡の条に、「隠れ居たから南毘都麻(ナビツマ)という」という地名起源説話があるところから、この語が存在したと考えられる。

とあって、「播磨風土記」の「南毘都麻」を引用して、ナブの語の存在を推定してゐる。

しかし、「播磨風土記」の「南毘都麻」だけでは、他に用例のない孤例であつて、ナビの存在を立証するには、いかにも弱い。井上通泰の「播磨風土記新考」は、「此島隠愛妻」を「(このしまに)ハシツマナビタリキ」と読みながら、「さて、ナビツマを隠妻の義としたるは、伝説に拠れるにて、無論是に依りてナビツマの名義を定むべきにあらず。」と慎重な態度を取つてゐる。ところが、私が今解説してゐる、「石山寺本大智度論」古点(第三種)

に、「伏匿」をナビカクスと読んだ例が見つかった。

問曰、酒は能く破れし冷を益して、身を令む心を歡喜せ。何れを以て不飲せ。

答曰、益するは身を甚く少し。所損する甚く多し。是故に不飲せ。譬は如し美を飲の其中に、

難提迦婆婆塞に。酒上有卅五の失。何等をか卅五といふ。一者、

現世に財・物虚竭。何以故、人飲酒を酔は、心无節の限りの、用費无度故なり。二者、衆病の之門なり。

三者、鬪諍之本とあり。(中略) 八者、伏匿ス之事き、尽く向て人と説く。(中略) 卅五者、若し得るは、為ると人と、

所生の之処に、常当狂駭なり。如是等の種種の過失あり。(石山寺本大智度論第三種点(貞観頃の加點) 一三

15 / 19 ~ 16 / 17)

「酒に三十五の失有り。」と言つて、飲酒の書を列挙してゐるが、その八番目に「伏ビ匿ス」の「之」事を、尽く人に向(ひ)て説く。」と言つてゐる。酒を飲むと、気が大きくなつて、隠して

おくべきことを、他人に向かつて、みんな喋つてしまふと言ふのである。「伏匿」は、大修館書店の「大漢和辞典」に、「フクトク、ふしかくれる。ひそむ。世を避ける。」と説く。

「大智度論」古点のこの例を追加することによつて、「かくれる」または「かくす」意味のナブの語の存在してゐたことが確實にな

つた。従つて、「南毘都麻」の島の伝説は、このまま受け入れてよからうと思はれる。

「南毘都麻」の伝説は、『播磨風土記』が編纂された当時の人々には、広く知られてゐたらしく、『万葉集』には、「稲日都麻」「伊奈美婦」「印南都麻」として歌はれてゐる。

日向かふ 淡路を過ぎ 粟島を 青がひに見つづ 朝なきに 水手の声呼び 夕なきに 梶の音しつづ 波の上を い行き

さぐくみ 岩の間を い行きもとほり 稲日都麻 浦廻を過ぎ 鳥じもの なづさひ行けば 家の島

荒磯の上に (万葉集 四・五〇九) 淡路の 野島も過ぎ 伊奈美婦 辛荷の島の 島の間ゆ

我家を見れば (同 六・九四二) 我妹子が 形見に見むを 印南都麻 白波高み よそにかも

見む (同 一五・三五九六)

ただし、「南毘都麻」が、現在の地形で、どこにあるのか、また、土地の隆起で、陸地続きになつたとしても、どこに相当するのか、

わからない。加古川の川口に立つて、南に広がる海を見渡しても、島らしいものはみあたらない。また、北方の山並みまで、平坦な

台地が続いてゐて、海から見て、島に見えたと思はれるやうな小高い所は見当たらない。「島はあるが、是に關する伝説はない」と言ふのが普通であつて、「伝説はあるが、これに相当する島が

ない。」と言ふのは珍しい。「南毘都麻」は、どこへ行つてしまつ

たのであろうか。(岩波の「日本古典文学大系本の頭注に「兵庫
県加古川の川口、高砂市あたりか。ツマは川口の突出部」とある。)

なほ、ナビツマのナビについて、加藤良成氏の『出雲風土記参
究』に、「神名樋野」のナビの説明の中で、「播磨風土記」のナビ
ツマを引用して、「隠れ籠る意の上二段動詞の連用名詞形であ
る。」と説かれてゐる。ナビツマのナビが「隠れ籠る意」である
ことは、確かだとしても、「神名樋野」のナビとを一緒の活用
にして論ずることはできない。「南昆都麻」の「昆」は、上代特殊
仮名遣で言へば、甲類に属するが、「神名樋野」の「樋」は、乙
類に属するからである。

(本稿は、平成二十二年五月二三日、京都大学で開催された訓点語
学会春季大会で口述した原稿に加筆したものである。平成二二年
一〇月一日、百歳の誕生日に記す。)

(おおつは へいじ 岡山大学名誉教授)

研究室内蔵図書雑誌目録 I

〔単行本〕 (平成二十二年一月〜十二月)

小説の日本漢文(対訳) みずほの国 高度な漢文法の修得(茂木
雅夫編著)

日本の夕映えに立つ(茂木雅夫)

日本文学の魅力 横光文学の位置(茂木雅夫)

安田女子大学言語文化研究叢書15 『八百屋お七秋月妙菜伝』杉本
好伸編(安田女子大学言語文化研究所)

〔報告書〕

学習院大学人文科学研究所報(学習院大学人文科学研究所)二〇

〇九年度版

勝又基編『本朝孝子伝』本文集成(明星大学平成二十一年度特別
研究費(共同研究助成費))「説話文学の中世と近世——本朝孝子
伝」を中心として」研究成果報告書)

京都府立大学学術報告 公共政策(京都府立大学学術報告委員

会) 一

京都府立大学学術報告 人文(京都府立大学学術報告委員会)六

一

研究年報(大阪府立大学上方文化研究センター)十一

研究年報(大妻女子大学 草稿・テキスト研究所)二・三合併号

コーパス日本語学の新展開(文部科学省科学研究費補助金特定領

域研究「日本語コーパス」日本語学班)

国文学研究資料館年報(国文学研究資料館)平成二十年度(二〇

〇八)

平成二十二年研究成果報告 八戸市立図書館所蔵南部家旧蔵本実

録解題(国文学研究資料館)